

遠隔教育の可能性と課題

— 2002年 日本語教育シンポジウム記録 —

The Possibility and Problem of Remote Teaching

— Symposium of Japanese Education 2002 at Meikai University —

はじめに

本稿は2002年11月23日（土）、明海大学で開催された「日本語教育国際フォーラム2002」において標記テーマについて討論したシンポジウムの記録である。明海大学堀口純子教授のコーディネートのもと、各パネラーが先ず個別の発表を行い、そののち討論、フロアからの質問への回答という形で進行した。

なお、取り纏めはパネラーの一人であった山本陽史が行った。

討論内容を収録しているが、中でしばしば言及されている各パネリストの当日配布したレジュメは本文の後に掲出してあるので参照されたい。ただし、理解の便宜上、本文中に画像等を収録している場合もある。

○パネリスト（発表順・敬称略）

横山高広：オーストラリア・セントラルクイーンズランド大学教育芸術学部日本語教育コースレクチャー

山本陽史：明海大学外国語学部日本語学科主任・教授、別科日本語研修課程長

汪 玉林：中国・北京外国語大学日語系主任・教授、明海大学客員教授

蘇 克保：台湾・東呉大学日本語学科専任講師

李 徳奉：韓国・同徳女子大学校教授、明海大学客員教授

○コーディネーター

堀口純子 明海大学外国語学部日本語学科教授

I 各パネリストの発表

1 横山高広（セントラルクイーンズランド大学）

今日はオーストラリアの「遠隔教育」についてお話しさせていただきます。

まず皆さんご存知の通り、オーストラリアは非常に国が大きく、国土面積が日本の22倍、人口密度でいいますと1平方キロメートル当り日本の340人に対してオーストラリアではわずか2人と、しかも、その少ない人口の85%が皆さんよくご存知の海岸部のブリスベン、シドニーなどの都市部に集中している。では、残りの15%は、どこに住んでいるかという「アウトバック」といわれる内陸部に、いわゆる大都市に住む必要のない人達、例えば農場経営者ですとか、トラックの運転手ですとか、そういう人達が、こういうところにまばらに住んでいる。そういう内陸地では、例えば、次のお隣さんまで30km、40km、一番近い小学校まで200km、300kmという例がたくさん存在している。オーストラリアでは主にそういった家庭の子供達のために「遠隔教育」というものが、1920年頃からスタートしました。当然、その当時はコンピュータなど発達していませんから、最初は郵便による通信教育という形で、先生と子供達の間で教材を行き来させるといった形のものが行なわれていました。この写真は、郵便局がこういった遠くに住む家庭に一つずつ割り当てるバッグで、そのつど封筒で教材を行き来させるのではなく、このバッグを再利用して教材や採点したテスト等が先生と学生の間を行き来する形になっています。

そうこうしているうちにワイヤレス時代が始まる。1950年頃、日本にはあまりなかったのですが、無線による交信が、先生と学生の間で始まります。当時、オーストラリアでは、特に内陸部では電気が発達していない時代ですから何を使っていたかという、資料に「ペダル無線」と書いてありますが、自転車のペダルと同じ要領で、ペダルをこいでいる間だけ電気がおこる発電機がありまして、写真の女性の足元にペダルの発電機があるんですけど、そういったものが先生側と子供側の家庭に一台ずつあって、無線で生徒と先生の間、いわゆる無線上の授業「空（そら）の学校」「School of air」と当時はいわれていたのですが、そういったものが始まります。現在も無線による授業は行なわれていますが、今はもちろんペダル発電ではなく電気による発電です。この写真は現在の遠隔教育の様子で、中学校ですね、これは使われているスタジオ、これは電気の無線です。ただ当然、無線をお聞きになった方は、ご存知かと思いますが、外国語を無線で聞くのは非常に聞きとりづらくて、特に僕は日本語教育の遠隔授業についてしかあまり知らないのですが、小、中、高校生は無線で日本語を勉強することは非常にむずかしい。しかも無線というのは僕もよく詳しくはないのですが、太陽の光線の具合にも関係するらしく、天気によって、例えば今日は曇りだから向こうの学生の声が全然聞こえない、そういうようなことが発生するらしく大変都合が悪い。そこで、オーストラリアのクイーンズランド州の教育省が今やろうとしているのは、どんどん電話を取り入れていこうということです。この電話の写真がのってまして、いわゆる普通の電話のような受話器で話すのではなく、この写真のように3つの三角形になってまして、この三角のこの部分がマイクになっています。学生は前方から先生の声が聞こえる。学生はまったくFace to Faceの会

話と同じように話ができる。それから非常に声がクリアに聞こえるという利点がある。現在一番この電話による授業が行なわれているのは、主に田舎の地域で、学校は近くにあるけれど、日本語の先生はいないという場合です。それは政府予算の関係ですとか、日本語を選択したい学生数が少ないとか、親が、「どうして日本語を勉強しなくてはいけないのか」（そういう家庭も非常に多いのですが）、と行って来るような地域にある学校、そういう学校を何校もリンクして、先生は一人で多数の学校とリンクして電話によって授業を行うということが行なわれています。電話による接続と併行して、先ほどお見せしました通信教育も同様に行なっています。通信教育で先に教材を送って、学校で勉強させて、週に1回電話をつなげている。月に1回は、先ほどの先生が「今日はこの学校」、「明日はこっちの学校」とローテーションを組んで先生が実際に会いに行って、そこで、授業を行う事もあります。

このように比較的長い歴史がオーストラリアの遠隔教育にはあるのですが、その中で利点、欠点というものがあるのは当然出てくるわけです。まず利点の第一は、教育の機会が少なかった遠隔地に住む子供達だけではなく、身体的理由により学校に通学できない子供や、何らかの事情で中途退学した子供達のためにも教育ができることです。それから、非常に低コストなことです。先生をもう一人雇用するよりも断然に安い。オーストラリアは特に、電話料金が安いということで、もう一人先生を雇うのに比べると、1時間200円ぐらいでどこにでもつながってしまい、しかもあまり通話時間が換算されないのです。

それから一つ、日本語の遠隔教育で授業はリスニング、つまり生徒は聞いて判断するんですね。ですので母国語、外国語問わず聞く力が非常に発達します。僕も学生と遠隔授業で話しますところらの言っていることは繰り返さなくても聞き取ってくれる。ただ、それに対する反応は簡単には難しい学生が多いようです。

それが欠点にもなっていて、こういった遠隔授業では、学生の耳にしか訴えることができません。学生の目に訴えるように、動作で説明したり、ピクチャーカードを使って新しいボキャブラリーを説明することは難しい。必然的に、そのような授業は進行が遅くなります。

それから授業時間の融通性の問題もあります。電話がつながる時間はあらかじめ電話会社との提携で何時から何時まで、と決まっている。ところが、実際に教えていると、何時00分00秒に終わるのは難しく、しかし、遠隔授業はそうしないといけない。だから早めに授業を終わらせないとしりきれとんぼに終わってしまいます。

それから、これは一番多くの報告のある欠点ですが、教師と生徒、人と人とのインターアクションに限られるということが挙げられます。どうしても情報が一方通行になりがちで、先生から学生に対して、当然学生もレスポンスしますが、どうしても、例えば討論ですが、そういったものは顔を見ないと発生しにくいということが報告されています。オーストラリアではつなげるのは、もちろん、遠くまでつなげようとしています。つなげるのが目的ではなく、あくまで、学生側が効果的に勉強することが第一ですから。

では、どうすればよいか。一つ考えられているのは、耳しかないなら視覚も全部補おうじゃないか、教育省がおこなっているバーチャルスクール、インターネットだとかFAX、それからコンピ

ュータ、先程の電話、それら全部足して視覚が足りないなら視覚を足そう、というものです。インターネット上でパスワードを学生に取らせて、先生が電子ホワイトボードに書いたものが学生のコンピュータの画面上に出てくる。学生も特別なマウスパッドを持っていて、その上にひらがなで「あ」と書くと先生と自分のコンピュータの画面に「あ」と出てくる。そういった方法と共に、当然FAXも利用しながら、視覚が足りない分を補おうという風になっています。

教育省の発表では、2004年までにオーストラリアの遠隔教育、小、中、高の遠隔教育はすべてこのバーチャルスクールになるそうです。

もう一つ、オーストラリアで行なわれているのは、もともとの遠隔教育の欠点をあまり目立たないようにすればいいのではないかということです。例えば、大学での大講義、主に先生から学生に情報が一方通行ですが、もともとそういう性質をもったティーチングであれば、どこでも何人でも何ヶ所でもいい。私もセントラルクイーンズランド大学では何ヶ所か、オーストラリア国外のフィジー、シンガポールというインターナショナルキャンパスで、キャンパスごとに講師を雇用するのではなくて、テレビ電話で国内キャンパスと接続しまして、先生は一人ということになっていることも多いです。この写真がちょうどつながっているところです。このフランクなおじさんが先生、このメインスクリーンにうつっている画像がそれぞれ各キャンパスに配信される画像です。ここに出ているテレビは他のキャンパスの学生達の様子です。当然学生達もマイクを使用して先生に連絡することもできるということです。

その中でCQUの日本語学科は、より多くの学生、より遠くの、より本物の日本人、より本物の日本語、生の日本文化と接する機会が非常に日常で少ないオーストラリアで日本語を学習している学生のために、明海大学とリンクしてテレビ電話、ISDN回線を使った授業を行っています。日本語学習者に、何かを伝えることは、日本の学生にも非常に勉強になりますが、日本にいる留学生と日本語の力を比べてしまう。自分の言っていることが難し過ぎてオーストラリアに住んでいる日本語学習者には伝わらないということに気づくわけです。このクラスではなるべく先生は学生達の学習に入りこまないようにしているわけですね。CQUの学生と明海大学の学生が、それぞれ調べてきたことを発表してそれについてお互い勉強する。お互いどういう風に思うか勉強するということを目標にやっています。ただ、実際にむずかしい点も出てきています。

まとめさせていただきたいのですが、遠隔授業というのは、つなげることが目標ではなくて、あくまでももちろん、より多くの学生に何かを教えるということも目標ですけれども、どこまで効果的に学生が学習できるかということを決して忘れてはいけません。そのためにはいくつかの回答があり、一番言えるのは、遠隔授業専用の教材がまず必要ですね。学生のレベル、学生の年齢によって違いますけれども、話し声を聞いて教科書のどこを読むかわかる。例えば、「そこ読んでごらん」という風に小学生にラジオの上で言っても、まったくどこを読んでいいかわからない。オーストラリアの場合、教育省が「遠隔教育部」というものを作って教材作りや、先生のトレーニングを行なっています。授業の終わった後にフィードバック、これはこうした方がいいとか、非常に地道なのですが、これは遠隔授業の質をよくするためには非常に有効な手段です。

以上、非常に駆け足になってしまいましたが、オーストラリアの遠隔授業について、後程ご質問

などありましたら、お伺いしますが、どうも聞いていただいてありがとうございました。

2 山本陽史（明海大学）

遠隔教育ということでいろんな例がこの後挙がってくると思いますけれど、私は以前から日本の放送大学、University of Airで非常勤講師を勤めております。放送大学というのはイギリスや韓国など、各国に日本の放送大学に似たスタイルの大学があります。実は私は明海大学の先生であるとともに放送大学の学生でもあります。ラジオ、テレビ、ビデオ等で授業を受けまして、途中通信指導の問題と解答を郵便でやりとりする。これを私はなかなか出さないで、全然単位が取れない非常にひどい学生ですけど、そして最後に、学期末試験を行なうサイクルを半年で行うという形で放送大学の教育は行なわれています。

ただ先程、横山さんがおっしゃったとおり、どうしても放送だけでは、テレビ、ラジオですから画質、音質は非常にいいんですけども、臨場感というものがない。それと一番放送大学で悩んでいるのは受講生の多い科目のテストをどうするかということだと思います。英語や心理学などは何千人という人が一斉に試験を受ける、あるいは通信指導を出すわけですね。そうすると先生のマンパワーが足りなくなってしまう。どうしてもマークシートのような選択式の課題をせざるを得ない。だから放送大学のような形の遠隔授業の問題は、ただ授業すれば良いということではなく、そういうケアの問題ですね。eメールにしても郵便で課題をやりとりするにしても、時間の制限もありますのでそれをどのようにして効率的に評価していくことがやはり大きな問題ですね。

また放送大学の場合は各地に設置されている学習センターで面接授業、スクーリングがたくさん設けられています。私も年二回集中講義の形でスクーリングを担当させていただいてます。放送の授業では先生との直接のふれあいがいいものですが、その機会が与えられるスクーリングは非常に学生に人気があるんですね。遠隔教育のような場合、スクーリングのようなふれあいの機会との併用ということが重要ではないかと思います。明海大学の事例を紹介する前に放送大学のことをお話しました。日本の放送大学だけではなく、いろんな国もそのような事情をかかえているのではなかろうかと思います。

さて今画面に出ておりますのが、先程横山先生がCQU側の画面を出していただいたんですけど、明海大学側の遠隔教育の様子です。これは一昨日に私が行なった北京外国語大向けの遠隔授業の風景を撮影したものであります。ここで向こうの教室の画面、こちらの画面、親画面、子画面で、これだけでは見にくいものですから明海の



教室ではこの前の2306という教室に設備があるのですが、プロジェクターで大きなスクリーンで映し出して、より見えやすいようにしています。設備としましては、モニターの上にCCDカメラがありましてそれでもって教室の様子をうつすという形になっています。

もう少しアップにしましょう。こういう状態になります。モニターの下にありますのはビデオ、ビデオソフトをそのまま相手側に流して見せることができます。それから、これはパソコンですね。これはインターネットにもつながるので、その画面をそのままやはり送ることができます。それから資料提示装置、OHCがあります。これは確認するためのモニターです。ここに映し出すものを置きまして、それを映して、ボタン切り替えによって教室から資料提示の映像に変わることができるのです。



これは明海の学生が北京の学生にレポートをプレゼンテーションしていろいろ質問を受けたりとか討議をしている様子になります。汪先生も北京側におられたので、このことについてまた後でお話があるかもしれません。資料提示装置のいいところはコンピュータに取りこんだりしなくてもそのまま実物を映せることです。この学生は日本の食生活についてのレポートをしています。ここではインスタント食品、ラーメンの袋とかそういう物を見せている場面です。板書ですが、教室内の黒板を使っても、画像の解像度の問題から、あまり効果がないわけです。ですから、資料提示装置にそのまま手書きで濃く書いて映すか、あるいはパソコンで出すか。パソコンは黒板がわりに使っている状態となります。



ただしパソコンでは普通の文字の大きさでは相手側のモニターが小さいこともあって、字が良く見えない。拡大して太字・ゴシック体にして見せるという形で使っています。

今、一番授業をやってわかるのは、やはり私の講義では北京側の学生が耳だけで聞いても分からないような言葉があり、そういう場合にはパソコンで実際に文字を書くということが非常に大事になってくるということです。これは両方の教室が映し出された状態です。大きな画面は北京外大で小さい画面は明海大学側の教室です。この親画面と子画面は瞬時に切り替えることができます。それから手元に装置、リモコンがありまして、例えば北京外大の学生の誰か指名したいとする。向こう側の人を指名するのはなかなか難しい。このカメラはズームができるんですね。北京外大にあるカメラを明海側からズーム操作できるようになっている。そこで北京の学生のところにズームアップしていったり指名することができます。慣れないとなかなかもたもたして、難しいですけども、向こう側でもこちらが側でも画面操作ができる。さっきの資料提示、ビデオ、それからパソコン画面にそれぞれ切り替えることができる。ただ、問題は資料提示に切り替えると教室の画面が出ない。1つの画面しか出てこない。設備的にそうなっている。ですから、教員がリモコンや機械を話をする傍ら切り替える形だと、どうしてももたもたしてしまう。学生にとってストレスになってしまう形になりますね。学生が発表している場合には私はオペレータ役にまわっているので、その場合には、わりとうまく切り替えられますが。考えながら、しゃべりながら、操作するというのは、慣れないと難しいですね。



これは学生の発表風景です。これは図録のようなものを持ってきて見せている。本も使えるというのが資料提示の一番いい点であろうかと思います。

みんな顔がやや上向いていますけれど、どうしても小さいプリンターではなくてプロジェクターの方を見てしまう。スクリーンの方を見てしまうので、あごが上がってしまうということです。



横山先生の発表の中にありましたけれど、ISDN回線を2本、こちらから送る回線と、それからもらう回線という2本の回線を使って授業をしているわけですね。今のところ、明海の場合にはセントラルクイーンズランド大学、北京外国

語大学との間で行なっています。ISDNでは、どうしても通信容量の限界から、ストレスが出てくる。つまり、画面の動きが遅くて、紙芝居とまでは言わないけれど、もたもたした動きになる。ですから例えば、こういう風に指差して、ぱっと動かしちゃったりすると、何かよくわからなくなっちゃう。しばらくの間、じっと指差していないと、うまく見えないということです。つまり、思った通りのスムーズな動きにならないという問題があります。インターネット回線でやりとりすれば、ブロードバンドの時代がきたわけで、そういう問題が解決できないかというようなことを今、考えているところです。試行錯誤ながらも新しい高画像システムを作っていこうという風に思っているところであります。



また、大事なことは横山先生の発表にもありましたように、ただ、授業するだけでは意味がない。顔が見える、声が聞こえるといっても本当の意味で教室の中で交流しているわけではない。そのところをどう補って行くかということで、他のメディアとの併用ですとか事前・事後の授業フォローがなければ本当の意味での効果的な遠隔教育ができないのではないかと思います。

ただし、そういう問題を差し引いてもこういう遠隔授業のようなことができるようになったという点は、非常に評価できることだと思います。

もう1点だけ問題を挙げますが、海外との遠隔授業の場合、時差の問題がある。オーストラリアは国内でも時差がありますが、これはなかなかむずかしい問題です。時間帯をどうやって調整するかと。北京とセントラルクイーンズランドの場合、1時間の時差なので、あまり支障無くできるわけですが、たとえば地球の反対側の国でやるということになると、本当に時間設定がむずかしくなってくると思います。

それと、評価システムをどうするかということが問題としてあろうかと思います。

簡単ではありますが、私の話はこれまでとさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。

3 汪玉林（北京外国語大学）

中国全体の遠隔教育について少し簡単に紹介します。放送大学は普通の大学と同じように今、中国中央電子大学があります。テレビの3チャンネルは中央電子大学のチャンネルです。80年代の半ば頃、大学を作りまして中国全土に発信しています。全土といってもチベットあたりはちょっと無理なんでチベットの人はかちんときます。ここで勉強している学生は卒業証書を取りますと短大のコースと同じような卒業証が発行できます。それが80年代ですが、今でも中国の中国中央電子大学で講義を受けている学生もいます。最近、去年からインターネット学院というものができている。中国の国立大学の中で国のプロジェクトとして投資してきたものですからインターネット学院は3年コースと6年コース、3年コースは短大の卒業証、6年は大学の卒業証書となっています。これは国のプロジェクトですが、各省にもインターネット学院が最近どんどんできています。

明海の遠隔授業は1998年10月20日からスタートしたもので、谷光忠彦先生（現在明海大学名誉教授）が第1回の講義「平仮名・片仮名の成り立ち」について講義を始めて、現在まで、この11月21日までに山本先生の授業で全部で50回あります。最新の講義は明海の学生の発表で「日本の食生活の変化について」、それからその前には「日本の家紋について」「コンビニ戦略について」がありました。言葉から日本文化、日本料理、日本の最新情報とかいろいろありますので非常に学生は喜んでいます。

現在は大学院生が講義を受けています。大学院生が18人、大学院2年生8人、学部生50人ぐらいで、学部生3年生22人それに1年生も7、8人出ています。1年生といいますが中学校、高校で6年間日本語を勉強してきた学生です。授業については評判が良くて、学生は喜んでいます。応募者がいっぱいです。ある程度日本語ができないと、この授業に入れない。規制されますので非常に効果があります。

98年から今日までこの講義を受けて、いろいろ卒業論文とか就職の自己推薦とかその方面の内容について話をしたり、これに基いて論文を書いたりする学生もいます。非常に効果があると思います。

学生にアンケート調査を行ないました。「これから、どんな授業をしてほしいですか」という内容です。「同時通訳の授業ができれば良い」という回答がありましたが、同時通訳はうちの大学でもそういう授業があります。非常に同時通訳の人材がありません。そうしますと両大学の間でも同時通訳があればいいなという学生がいます。

それから日本の最新の社会情勢、最新の研究成果について知りたいとか、日本の動向、若者の生活、日本の歴史、新語について、流行語について、日本文化に関する面白いこと、それから何よりも学生同士の交流が必要と。明海大学の学生の発表が2回程あったのですが、これからはうちの学生も発表したい。学生同士の発表で、それからもっと討議してもいいのではないかと。それから授業内容は大変新鮮である、話もいい、ずっと続けてほしいという回答もあります。

ご存知のように、中国の各大学は日本人の先生を毎年招いています。うちの大学の場合、日本語学科は今、日本人の先生は5、6人います。それから日本の学生は10何人います。先生は北京に来

ると渡航費も宿泊費も随分かかります。経済的に遠隔授業の方がそんなにお金がかからない。そういう利点もあります。

もちろん欠点があります。何かというと、まず、臨場感がない、親近感がない、日本の料理を紹介してもボタンを押して料理が出ない、お寿司も出ない。どこかいい会社が開発すればいいじゃないか。これは日本のお寿司だよと、ボタンを押して出れば食べられる、それはまだ無理。それは1つの経験といいますか臨場感がない。それからテキストがでない。

この授業を受けて学生は、まず普通の伝統的な技法と違って4つの点で随分学生の日本語の能力が高められた。1番目は、聞く力、2番目は、まとめる能力、3番目は、話す能力、4番目は、集中力。普通の日本語学科なら遅刻したり、授業中しゃべったり、物を書いたりできるのですが、遠隔授業ですから、それができない。

もう一つ普通の授業であれば、授業中は先生ちょっと失礼します、待って下さいと言われればその機会を設けます。その結果どうしても集中が弱くなる。しかし遠隔授業では、そういうわけにはいきません。学生の遅刻や居眠り、絶対に許しません。1分間、1秒間でもお金がかかってやっていますので集中力が必要。

それから授業中まとめてメモをきちんととらなければ、先生の話が聞けるのはまた来週になってしまうので、聞く力、まとめる能力、話す能力、集中力がこの遠隔授業を受けて学生が随分よくなっています。

最初、この授業を受ける学生は字引を持って、字引を引いて講義を受けていたのですが、だいたい講義の内容について80%、90%わかる。だんだん時間を重ねていきますと字引はもういらぬ。メモだけで充分。

最初、普通の授業を受けるように学生はよそ見をしたりしていたのですが、遠隔授業では機械が動いていますので集中力が絶対必要、一休みできない。普通の授業なら先生の話をもじめに聞いて、メモをとって考える時間は90分の中でまあ3、40分くらいではないですかね。隣同士と話をして、それからよそ見をして他の本を見たりして、そんな風に授業を受けている学生もいますので。しかし遠隔授業ですから、それを絶対許さない。きちんと聞いて、きちんとメモをとって、よく先生の話聞く。それが1時間ぐらいやるのですけれど、絶対集中力がつく。学生が集中して授業を聞く。非常に役に立っている。

それから先生の質問に対しても「えーわかりません。少し考えさせて下さい」などといっているのは許されません。できるならすぐ答える、できなくてもすぐ返事をしなければならない。機械はどんどん動いていますから。そういうことから聞く力、まとめる力、話す力、集中力がこの授業を通じて随分高まったと、そういった点が学生の方からも評判がいい。

もう一つ、これは語学教育ですが、明海遠隔授業は語学に関するものは中国では初めてです。この間、2、3回国際シンポジウムをしましたが非常に評判が良く、98年に中国全土の50の大学が北京に集まって大学全体会をやりました。その国際シンポジウムは明海から発信して行ない反響を呼んでいます。今、広東でもそういう施設がありますので北京外大とやりましょう、地方の大学もどんどんやりましょうと、非常に広がったと思います。残念ながら、今、明海大学と北京外大だけ

でやっていますので、国内の大学はもうしばらくの間、来年あたりにはできるのではないかと思います。今、準備をすすめているところです。

それから一番いいところは明海の先生の研究している分野がすぐに北京外大で使える。例えば佐々木先生、小島先生、谷光先生、山本先生のそれぞれの研究成果がすぐに北京に伝わる。非常に良かったと思います。

毎年、集中講義の先生を北京に招きますが、その時間の制限もあるし、それから海外出張に毎日行くわけではないので、知りたいことがあっても来年、さ来年、ということがあります。やはり遠隔授業があれば非常に便利ですすぐできる。そういう利点はどんどん活用して遠隔授業をすすめたと思います。

それから今、うちの方からまだ発信できないものですから、これから北京外大の方から発信したい。日本語だけでなく、例えば他の学校の先生と交流できればと思っています。

また、大学院生になりますと日本の社会について広く研究していますので、日本経済とか、日本政治、社会に広く関心を持っています。それを学生は明海の方に発信できればと、そのような声もあります。

たしかに経費はかかりますけれど。人民元で880元ぐらいですから普通の国際電話の2倍になります。しかし考えてみますと、りっぱな講義ができていますので、そんなに高くはないと思います。以上です。

4 蘇克保（東呉大学）

遠隔授業について話すつもりですけど、実は台湾では東呉大学では遠隔授業は始まっていません。ですから現時点では現代社会について話をさせていただきます。

日本に留学している台湾人の学生は、実際にきた日本語の中で生活しています。一方、台湾にいる日本語学習者は、情報化が進んでいてテレビやインターネットなど使って昔よりめぐまれています。日本にいる留学生に比べますと、やっぱり情報量が非常に少ないと思います。

また、同じ台湾でも南北によって全然違います。ですから、これからの遠隔授業の活用で情報のギャップを埋めることができるのではないかと思います。

皆さんのお手元に資料があると思います。表1をご覧くださいければと思います。表1で交流協会の調査では台湾の日本語教育の問題点として、まず第1に教材・教授法に関する情報の不足、第2に日本の文化・社会に関する情報の不足などが挙げられます。

台湾では一般的に言えば語学教育そのものは日本と大きな差はありません。例えば今、明海大学に特別聴講学生としてお世話になっている東呉大学の学生に聞いてみますと「日本でできることが台湾でできない理由は为什么呢」と。文化や社会に関する情報の量と質が台湾と違います。特別聴講学生が日本の環境の中で生活していますから、いろんな情報が入ってくる。ですから文化や社会についての教育はまだ台湾では足りないと思います。

また大学院の課程になりますと内容も十分であるとはいえない。例えば私が勤めている台北の東呉大学日本語学科はマスターコースとドクターコースが両方ありますので、いろんな専門の先生をお呼びしなければなりません。

次に台湾における日本語教育に見られる地域格差についてですが、台湾は日本の九州と同じぐらいの大きさの島ですけど、細長い島で、真ん中に中央山脈があります。中央山脈というのは3000m以上の山が200ぐらいあります。距離は短いですけど交通面から言えば全然便利じゃない。飛行機を使えば台北から一番南の高雄までは30分くらいですけど、バスでは5時間ぐらいになります。東部だともっと時間がかかります。ですから都市化の程度も全然違います。南部より北部の方が進んでいて、東部より西部の方が進んでいます。最近南部でも大学、図書館、大型書店のチェーンなどが整備されました。でも日本語学習の環境は北部に劣っています。

例えば本学、東呉大学と明海大学と朝日大学との共催で毎年11月に台北で開催される高校生の日本語スピーチコンテストは、今年で4年目になりますけれど、資料の表2のところ参加者はほとんど都市に集中していて南部より北部の参加者が多くて、今回だけでなく例年、東部からの参加者は一人もいません。往復だけでも1日ぐらいかかるので東部の参加者はほとんど来ないのです。スピーチの内容も地方の高校参加者は初歩的なミスがやや多いです。例えば「おいしいの料理」とか台湾や中国人によくみられるミス、「ごはんを食べているの人」というようなミスがやや見られます。それは先生に直してもらっていないか、それとも先生が直さないか直せないか、そういう言い方は失礼ですけども、考えてみると地方にいる先生の数も少なくそのレベルも平均すれば北西部台湾に比較すると高くないのではないかと考えられます。

また、語学教育では授業以外の刺激も大変重要だと思います。東呉大学日本語学科のアンケートでは、学生達が授業以外で使っている、または使いたいという補助教材として、まず第1に「日本人の友達との交流」。日本人の友達というのは聞いて見ますと、日本の彼氏、日本の彼女がほしいと言いましたけど。というのは授業中、台湾のクラスでも30人ぐらいのクラスですけど、一人3分、5分結構しゃべれると思うのですけれど、でも日本の友達がいますと、一緒に食事をしたり1時間、一緒に遊んだりも3時間…彼氏、彼女がいれば10時間以上勉強ができるんじゃないかという声もありましたね。ちょっと動機が不純だと思いますけれど、日本語の勉強にはなりますから。

このように「日本人の友達の交流」が一番効果的だと思われていま。次は「テレビ番組」。ニュース番組を見てのじゃないかと思ったら、「アニメ」ですね。あと「ドラマ」ですね。次は「書籍」。聞いてみたらマンガが圧倒的に多いですね。ですから連れてきた学生のお土産のほとんど荷物の中はマンガばかりですね。みんなマンガを買って帰るんですよ。教師としては恥ずかしいですね。教師のトランクの中にも何冊かあるんです。

次は「新聞、雑誌」あとは「日本の歌」、「インターネット」、「ファミコン」。「ファミコン」で日本語の勉強できるのかなと思ったら、「先生できますよ」。夜2時、3時までファミコンやっていて、それで日本語を勉強していると思っているんですよ。次の朝に居眠りして、それは夜、勉強してたから許してね、という。しかし、これも台湾に全般的ではないと思います。

例えば東呉大学の学生は台湾にいる日本人の友達と「ランゲージ・エクスチェンジ」、台湾の言い方では「言語交換」といいますが、台湾にいる駐在員などよその家族に中国語を教えてあげて、その代わりに日本語を教えてもらったりという勉強の仕方をしています。それは日本人と直接交流できるという意味でも、とても有意義です。しかし、日本人の滞在者は資料にあげていますが、これは今年交流協会からいただいた資料ですけど、台北市8773人、隣の台北県は1051人に対して、南の高雄市では1387人、中部の台中市は1002人、その他大きな都市でも数百人しかいない。つまり北西部の大都市のほうが日本人との交流の機会が格段に多いと思います。ですから日本人の友達、南の地方都市へ行くとみんな珍獣のように見られているという話です。「あ、日本人ですか。」て、止まって見られる感じがですね。南へ行くほど日本人が少ないということです。

次に紹介するのは東呉大学の日本語教育です。

台湾は大学、高校などで会話や読解などを通して日本語や日本文化への理解を深めさせている。そして大学院でも日本語や日本社会に関する各種の研究が行なわれています。東呉大学はこれまでずっと日本語教師の育成に力を入れてきましたが、学習環境を整えて、生徒の学習意欲を引き出すためには授業の他には次のようなことを行っています。

まず第1に「日本の大学との交換留学」。今、明海大学にお世話になっている長期留学生は半年と1年間がありまして、半年のは20名で、1年間は10名、合わせて30名ぐらいお世話になっています。これから大学院生の交換留学も計画しています。

それから日本の大学との交換教授、日本でのホームステイと日本語研修、日本や台湾の姉妹校・提携校との交流、日本語衛星放送の受信、などです。

さっきお話したように台湾では今まで学習環境整備にいろいろ努力してきましたが、最近台湾で

も注目されてきているのがマルチメディアによる教育やネットワークを利用して、その授業を変えようという試みです。

これから台湾の遠隔授業について、その歴史と現状を簡単にご紹介致します。1960年代に一方通行の放送教育がさかんになりました。70年代には、放送大学が始まりました。90年代は、政府主導で電子化、構造ネットワークが整備され、96年10月に、台湾の文部省である教育部は、遠隔授業の全面普及に力を入れました。今、合わせて30大学（22科目）がこの計画に参加しています。

また、近年台湾の各大学では遠隔授業が行なわれています。例えば台湾の南部、高雄にある中山大学、台湾の東部の東華大学は共同で教養科目の遠隔授業を行なっています。ただし、授業の内容はほとんど教養科目が中心で語学の授業はほとんどありません。ですから教育の質を高めるため今後、遠隔授業の期待は大きいと思います。

特に日本語教育の立場で考えると、遠隔授業で日本の大学の教育リソースを活用することで、日本と台湾の差を限りなく小さくできることを期待したいと思います。

例えば日本の各分野の専門家の講義を直接受けられるようにすることができし、インターネットを使って宿題やレポートのやりとりも可能ですし、大学院レベルになりますと論文指導まで期待できると思います。台北と地方の間に見られる情報格差、地域や分野による教師の不足を解決することなどが期待できると思います。

また、日本語教育の立場から「日本など外国の文化や社会についての情報をリアルタイムに得る」また、「台湾にいながらにして擬似的な海外留学の環境を作ることができる」、「台湾の各大学間での交流と教育情報の共有」のような特長が活かせると考えられています。

大学学部レベルでは日本文化、日本事情の講義、それか交流形式の会話の授業など。大学院レベルでは専門分野の講義や論文指導など応用できるのではないかと思います。

遠隔授業を利用して「国内にいながらにしてできる海外留学」がすでに夢ではなくなってきました。特に外国語学習の場合、できれば一番効果的なのは長期留学です。短期滞在でもそれなりの効果があげられる。しかし、経済的な事情があるので、すべての学生を留学させることは不可能です。ですから、その日本語教育に携わる者として学生達が台湾にいながらにして、まるで日本で勉強しているかのような、そんな環境を作ってやりたいと思っています。

以上です。ご静聴ありがとうございました。

5 李徳奉（同徳女子大学校）

もともと流行に敏感な私は、いつも風邪が流行る頃にはかかさず、風邪を引いておりますが、教師が風邪だと遠隔授業は本当に衛生的でいいんじゃないかと、そう思いながら韓国における遠隔教育をご紹介しますと思います。

遠隔授業、遠隔教育の歴史はとても長くて、そのパターンもいろいろあるかと思いますが、まずは古いパターンとしては手紙による通信講座、その次にラジオによる学習、それからTVテレビによる遠隔、これも代表的な遠隔教育だと思います。また衛星放送による教育、これは明海と北京との間で行なわれている電話回線によるTVテレビ学習、それも遠隔の1つのパターンだと思います。

だいたい、そのように考えると4つのパターンがあげられますが、それをあえて私は第1世代から第4世代まで、そういう風にあげてみたいのですけれど、第5世代はe-Learningによるいわゆるサイバー教育というパターンだと思います。このe-Learningパターンというのは第1世代から第4世代までを全部クリアしている。あるいは全部を統合した形になると思います。

遠隔授業のこれからの典型的なパターンというのはe-Learningパターンだと思いますが、韓国の場合は、だいたいe-Learningの形による遠隔教育に力を入れていまして2000年12月で全国の小中高大学全ての教室を高速網で全部つないだことがある。たぶん世界ではシンガポールについて2番目だと思います。カナダの場合もあるが、学校単位でつなげている。全ての教室を高速網で全部つなげたことは韓国の特徴で、画期的成功なことであると言える。

この高速網というのはADSLのことです、このADSLは2Mbpsから多ければ8Mbpsで動画などは問題無く検索できると思います。

ほとんどのテレビ放送のニュースやドラマをリアルタイムでいつでも個人的に検索できるシステムです。

大学の場合もサイバー大学というものを開設することが流行っていきまして、レジュメには19の大学が紹介されていまして、4年制大学として17、2年制大学として2校あります。この19のサイバー大学というのは正式の大学として認められていますし、この大学だけのための学習生、すなわち学生もいる。ここでもつばらサイバー教育をとって卒業証書がもらえる。こういう形をとっているのは19の大学だけなのですが、この他にそれぞれの大学で講座単位でサイバー教育をやっているのはほとんどの大学でやっています。例えば家庭で講座をとることもできますし、明海に来ている学生の中でも韓国の同徳大学校の講座を受けることができます。学校間のサイバー教育はまた別の話なので今日は省きますですが、ここで紹介したいのは、この中でも韓国デジタル大学、ヨルリンサイバー大学—開かれたサイバー大学ということですが、オープンサイバーユニバーシティというところで、OCUと略しています。

このOCUというところは4年前からコンソシアムという形で開設された大学です、うちの大学もこのコンソシアムに参加しているのですが、私は4年前から日本文化理解という講座でここに参加しています。たまたま同徳のスタッフ達が日本語教育、日本語文化教育を教えることで開いた講座でありますのでノウハウもかなりあります。

私の場合は学習者数800名ぐらいの定員で講義を3回ぐらいしてしまして、800名を相手にいろいろ質問攻めにあったり、また主観テストというか試験をして採点するのに、まる1週間かかって、あとで病気になって、大変、試行錯誤重ねて今や何かつかんだ気がするのですが、それはずるい形でありまして問題点はいくつか残っていますが、可能性としての歯ごたえは充分ある。

そこで、そのうち今日紹介するのはOCUの日本語講座を教えているOCU所属の専任の先生なんですが、この学校の先生はうちの大学の卒業生でして、この先生はOCUサイバー教授第1号、もちろん教授はサイボーグじゃなく人間です。

教え方は2通りありまして1つは音声と文字による教え方、もう1つは動画像を使っているのですが、残念ながら今日は音声と文字だけを紹介したいと思います。

これは動画像を呼び出しましたら、だいぶ時間がかかってしまいまして1.5Mbpsしか使えない。少なくとも8Mbpsぐらいでないと自由に動画像を呼び出せないなので、呼び出すのに1日待って、また翌日、そういうことはできないので、今日は音声だけをご紹介しますが、ここで使っている教材は同徳の研究陣が開発したもので、そのままマンガみたいですが、それを使って、音声化して教材化して使っています。

<テープ紹介>

「～さん、昨日はごちそうさまでした。」

「いいえ、どういたしまして」

「本当に、おいしかったわ。～さんは料理が上手ね。」

「それほどでもないけど、機会があったらまた、作ってあげるね。」

このように絵が出て、何回でも納得いくまで、ずっと確かめられますので。これは意味の解釈ですね。あと単語の説明、文法の説明、もちろん音声による説明もあります

<テープ紹介>

「～さん、これ、どうもありがとうございました。」

「あー発表？どうだった？」

「えー、おかげでうまくいきました。」

「そう、よかった。」

「また、お願いします。」

「あー、いいよ。」

だいたいこういうパターンになっているんですが、動画像の場合は先生が画面に直接出て、テレビと同じように説明したり、または実際の場面を見せたりすることができます。

これの一番進歩した形、理想的な形をいいますと、もうちょっと動画像をいっぱい使えるようにすることだと思うのですが、そうするためにはADSLでも無理ですね。今、韓国ではADSL加入者は

1000万を突破しました。これは、ほぼ完成だと思います。1200万世帯のうちの1000万ですから。

今年からVDSLを広く使っています。VDSLは13～50Mbpsまで転送できますので、テレビとまったく同じような画面ができます。VDSLになりますと第5世代としてのe-Learningは本格化するのではないかと思います。

こういう遠隔授業という言い方は、はたしていいかどうか分からないのですが、遠隔教育と言ってしまおうと教える側のことしか考えないので、あえて遠隔学習という学習者の立場から、長所は受け手にあるんですね。いわゆる時空間を、空間だけでなく、時間を超えてリアルタイムじゃなくても学習者はいつでも自分の都合に合わせて勉強できることが一番大きなメリットだと思います。

それからコストもとても安い。コストが高くなるとe-Learningはそんなに浸透しない。

それからテレビ講座は利用するのが非常にめんどうなんですね。また、提示してもただ、見せるだけですから、学生達の手元に届かないのですが、e-Learningはすべての資料がファイル化されていますから、そのまま学生のものになる。それが大きな長所だと思います。

それから情報の切り替えが非常に早い時代ですから生涯教育にふさわしい。

それから学習者の心理的安定、よくにている学生、内気な学生もテレビや自分のPCの前では気を遣わなくていいわけですから、安定した環境が作られる。

ただ、短所としては

- ・緊張感が足りない。
- ・学習に精を出さない学生が多い。よくあることです。
- ・レポート、出席、試験などの代理行為の可能性が高い。
- ・教師が学習をすすめていく上で、学習者フィードバックのキャッチが遅い。できないわけではないのですが遅い。
- ・教師、学習者の両方において情報リテラシーが求められる。
- ・機械の使い方に慣れていないと、それに気を取られて学習できなくなる。

また、授業外の問題として

- ・技術的トラブルに巻き込まれることがある。これは、ちょっと注意すれば避けられると思います。

それから、

- ・インフラ構築や多様なメディア、またドメイン接続の際、標準化が足りない。これも世界的管理が進められているところです。
- ・学習効果を高めるためにはサーバやネットワーク、パソコンの十分な容量が求められる。インフラを構築しないと、これらは動かないということです。
- ・学習者を引きつけるためには、楽しく有益な授業になるようにしなければならない。

これはMark Presnskyという人が今回発表している内容なんですが、「現在のe-Learningの多くは学習者には退屈極まりないものであり、落伍者が続出している。彼らはスピーディでどこへでも飛べて、グラフィックが多く、楽しい教材を求める。この世代間ギャップを埋めなければ効果的なe-Learningは生まれない。学習してからただテストを繰り返す今のやり方では効果は出ない。コンピ

ュータゲームと教育コンテンツを組み合わせることによって問題解決が可能になる。」と、言っています。

この指摘通り、今のやり方では退屈なんですね。電子ゲームを経験している学習者にとって今のe-Mailを使っているような、そういうe-Learningでは辛抱できない。それにふさわしい世代の特徴にふさわしい教育コンテンツ開発することが大事だと思います。

それから

- ・設備のグレードアップを持続的に行なっていかなければならない。
- ・自律のゆえ、授業の登録率が低い。

とかいろいろ問題があります。

ただ、展望としては、こういう制限があるにもかかわらず、これからの時代的特徴はサイバーという新しい空間を私達は避けて通れない時代であると思います。このサイバーという新しい空間での教育も当然一つの教育のパターンとして定着できると思いますので、ADSLからVDSLへのネットワーク環境の構築、オンライン学習インストラクターの養成とか、そこの最後のところにいろいろこれから解決しなければならない課題を書いています。そういう課題の解決によって、いきいきとした有益なe-Learningの時代が実現できるのではないかと思います。

実際に初期の韓国におけるサイバー教育に参加した経験者の一人として、そういうことは自信をもっていえます。

ありがとうございました。

Ⅱ 討論

堀口純子（明海大学）：今から1人5分くらいで、みなさんのお話を聞いて、さらに追加したいこと、あるいは、言い洩れたことがあればお願いします。

横山高広：オーストラリアの場合は、もともと小中高の大学の下教育機関から始まって、現在は大学でも遠隔授業が行なわれているわけですが、やはり先程の繰り返しですが、遠隔授業をテクノロジーを利用してリンクすることでできている。

どのように学習者が効果的に学習できるか、どういう教材を使うか、どういうテクノロジーを使うか、具体的な方向を模索できたらと思います。

山本陽史：先程、説明不足で抜けたことがあります。二つの大学間で遠隔授業をする場合、時差の問題の他に、学年暦—いつから新学期とか、授業時間の違いが問題になります。一コマが50分とか90分とかいろいろある。どのように合わせるかということです。

（CQUとの遠隔授業のビデオ映像表示）

これは実際の授業を収録したもので、ただし、スクリーンに映っているものをビデオに収録したものです。下の部分がCQUの教室ですね。今、日本語学科の佐々木文彦先生の授業です。

（遠隔授業中の質問風景のビデオ映像表示）

ご覧いただいてわかるように何かぎこちないですね。こういうところを改善しなければならない。大容量の回線がないと、むずかしいです。

汪玉林：明海大学の先生からビデオが出ましたように、再利用が何回もできますね。

日本と中国では休みが違う。中国ではメーデー休み1週間、国慶節1週間ぐらい、春節1週間ぐらいありまして、しかも、新学期は9月で、なかなか時間を合わせるのが大変で、調整が大変、こちらの正式の授業は55分です。ビデオに取っておけば、高学年の他の学年にも利用でき、非常に効果があると思います。それから他の大学にも利用できます。非常に良かったと思います。

蘇克保：山本さんの授業を拝見させていただきまして、とてもうらやましく思いました。というのはリアルタイムで日本の動向をつかみたいと思っても、例えば、僕に日本の食文化を紹介しろといわれてできることは、チキンラーメンぐらいですかね。今朝、学生も食事している時、「先生の好きな歌手は誰ですか」「美空ひばり」。学生が言っていたのは「Windz」？ 全然ついていけない。という風に遠隔授業は有意義だと思います。

それから、東呉大学では教師陣の不足というのが大きな問題で、今までは集中講義で日本の先生に台湾に来ていただいていたのですが、台湾の文部省では最近集中講義の単位を認めないという方針を出した。語学の勉強は短期間1週間などでは難しいなどという。一理はあると思うんですが、でも現実問題、教師不足がかなり深刻です。ですから、これから遠隔授業を利用して、教師不足の問題を解決できるのではないかと思います。

それから、さっきお話しした日本との交流が可能になります。交流を考えているのは日本だけではなく、韓国と同時のリアルタイムの遠隔授業が可能ではないかと思います。

先生と学生ではなく、学生と学生との間の交流も期待したいと思います。学生の間では台湾人同

士が日本語をしゃべるのは難しいが、韓国の学生と一緒に日本語の勉強をすれば、いい刺激になるのではないかと思います。

李徳奉：明海と北京外大で今、行なわれている電話回線による講座、インターネットを接続しさえすれば、最も理想的な遠隔教育になるのではと思います。韓国放送大学というところではもちろんテレビ放送で、講義しているんですが、それをそのままインターネット回線を通して、いつでも学習者が自分の時間に合わせて検索できる両方をしていますので、そういう形も1つのこれからの解決の手段だと思います。

一つ提案したいのは、サイバー空間には距離が存在しないので遠隔教育は「遠い」という距離を前にだした言い方ですけれど、ちょっと距離感があるんですね。「仮想」という言い方もあるのですが、「仮想」というのも夢の世界、存在しないという呼び方でして、私はむしろ、「サイバー空間」で行なわれる「サイバー教育」とか「サイバー学習」又は「e-Learning」という呼び方がこれからの遠隔教育の名称として、ふさわしいのではないかと思います。

サイバー学習の学習者同士の接触させる活動として「グループ活動」をすすめているのですが、もちろんインターネット上で、グループ間でいろいろ作業してかなりの交流ができますが、それだけでは足りないのでオフラインで作業を補う形ですすめたいと思います。今、蘇先生がおっしゃったように、今、韓国の同徳女子大学校と日本の立教大学、台湾の東海大学、3つの大学は今年4月から日本語科の学生8名ずつです。24名が集まりまして1ヶ月間、日本で3週間、韓国で1週間3カ国の文化体験プロジェクトを始めています。来年は日本と台湾に行きます。来年は香港も加わって4カ国の学生と一緒に日本語で4カ国の自分の文化をお互いに紹介しながら1ヶ月間共に過ごす。これは非常に大きな収穫があったと思います。これから、そういったオフラインの交流も遠隔教育に足りない点を埋める形ですすめられるのではないかと思います。

堀口：5人のお話を聞きまして、いくつかの共通点、あるいは対照的な例があったと思いますが、この中で1つ、遠隔教育、「教育」という言葉を使って言う一方で、李さんの話の中でありましたe-Learning、「Learning」という学習者の立場から使っているような事をあげられたと思います。

いずれにしても、やはり学習者ということは、当然考えなければいけない事であろうと思いますが、この点につきまして汪さんの方では遠隔授業というテレビシステムを使ったテレビで授業をやっていることで学習者の集中力が非常に高まっているというお話が出てきました。それから李さんの話の中では学習者の心理的安定ということ、それは見方によっては学習者の緊張感が足りないという欠点として挙げられましたが、そういうことが出てきて、学習者の心理的な面でどういようなことが考えられるのか、ちょっと議論してみたいと思います。この点について何かあるでしょうか。

山本：ビデオのように繰り返し見られるのですが、とりあえず私達がやっているように、その時終わったら2度と見られないような、すぐに答えをその場で求めてしまう場合とでは、また見られるのなら緊張感が違うのは当然じゃないかと思います。

私の場合、そんなに厳しく聞いたりはしませんけれど、ぱっとあてると、うろたえているのがわ

かる。でもとにかく何か答えなければならない。実際、その場で返答する必要のない場合は聞いたことをそのまま返すようなやりとりになりますね。

このような語学教育でもあとで繰り返して見られるのと、一回限りでその場の集中力を重視するのと、どちらが有効的か一概に言えない。結局どういうバランスで組み合わせればいいのかという話なのかと思います。

横山：オーストラリアの場合ですと、明海大学とリンクが始まる前のことを思い出すと、台湾の先生、蘇先生の話がうらやましいと思いました。台湾の場合は社会の中に日本と接する機会が非常に多いわけですね。例えば、町に出ればマンガが置いてあったり、テレビをつければ日本のテレビドラマが流れていたり、非常にそういうことは、生の教材というか、触れる機会がある。

オーストラリアの場合、当然、日本人の観光客がたくさんいらっしゃるんですけど、正直、申しまして、まったく交流はない。日本人の観光客だけに限らず、「多文化社会」と、オーストラリアは言われていますけれど、実際にオーストラリアに行って、よく見ると、オーストラリア人はオーストラリア人だけ、アメリカ人はアメリカ人だけ、それぞれ国籍ごとにかたまっているんですね。そういう中で日本語を学習している学習者は当然、大学などのいわゆる「学校」で学習しますから、当然、意欲は非常に高いのですが、使う機会があまりないですね。明海大学とリンクを初めて始めた時、最初はわくわくしているんですが、山本先生がおっしゃったように、いざあてられると、どうしよう、日本語がまったく出てこなくなってしまうんですね。

僕達も英語を話す時、海外旅行に行った時など、中学1年から習っているのに全然出てこない。でも、実際に使えるということは、語学を勉強する時に非常に大切な技術の1つですし、知っていることを単純に使うことは、実は簡単に聞こえて非常に難しいことなんです。そのことが分かるだけでも大分、効果的といえるでしょうし、学生のやる気や集中力が高まる。ただ1つ、明海大学とCQUの遠隔授業、リンクでわかったことは、学生の日本語のレベルがあまりに違いすぎると、オーストラリア人の学生の方は、何を言っているかわからない。そうすると、遠隔授業ですわって、そんなに画面もクリアでなくて、誰かわからないだろうとすわって、無難に1時間過ごせばいいじゃないかと、レベルの差で集中力がどんどん下がっていく感もあります。

李：やはりサイバー使用になりますと、どうしても学習者の自律制御に頼るしかない。それはコントロールしがたいと思いますが、ただ、それを解決するには2つの方法が考えられます。

一つは学生の緊張感を何らかの方法で高める。私の経験から申し上げますと、ある課題を出して、その解決の仕方を一応つけて掲示板に出して、学習者自身の意見を出させるんですね。そうすると学習者はそれをお互いに読んでいて、非常に刺激を受けるのです。同じ学生のはずなのに、なんで自分よりはるかにすばらしいことを考えているのか。それにショックを受けるみたいです。教授がそれを説明しても、それは当たり前と思うみたいですが、同じレベルの学生の考え方が自分よりはるかに進んでいる。中には物好きな者もいるものですから、そういう刺激で、やる気を出す学生がかなりいるみたいです。

もう1つ、いつそ日本語を教えない、教えないつもりで、ただ学生の興味に合わせて楽しい文化資料をどんどん出して、例えば音楽なり、アニメなり好きなものを出しておいて、また、翻訳機を

つけておいて日本語を勉強しなくてもだいたい内容がわかるようにしておく。しかし、それを楽しんでいるうちに知らず知らずに日本語の勉強ができる。新しい教授法として、そういう効果を期待する。

ただ、今の世代には非常に効果がある方法ですが、著作権の問題がいつもありますので、それをクリアしないと楽しいおもしろい授業ができない。もちろん限界があるんですが、その方法である程度解決できるんじゃないかと思います。

汪：いくら機械が発達しても、先生がいくらりっぱな講義をやっても、学生の頭に入らないとだめです。

北京の場合、例えば明海の授業、私の場合は学生のメモをチェックする。ちゃんとメモを取ってください、それから、それに基いてレポートを出して下さいと指示する。そうしますと、後で私に聞いてもどうしようもない。

そのように、いくらいい設備といい授業でも、学生の頭に入らないと語学教育はできないんですから。ちゃんと聞いて、ちゃんと話して、ちゃんとメモを取って、ちゃんと暗記してということが必要になる。うちの大学の場合は三年生までは、ひたすら暗記させるんです。最初は短い文を、だんだん文学作品を高学年になると暗記させる。若いうちに暗記しないとすべて忘れてしまいます。

いくら、いい発音でも自分の頭にたたきこまないと、だめ。そのような機械とともにやっぱり頭にたたきこまないと。そういう風にしなければ、いくら先生がいいものを用意しても、設備を購入しても、何か改善しても、だめ。設備、授業を生かすための指導方法がありますので。私の場合は伝統的なやり方で暗記させる、メモを取る、レポートを出す。それだけで勉強しない学生、大変困りますので。また、ご存知のように中国の大学は全寮制ですから、先生がうちにいると、「先生、すみません。昨日のノート下さい。」と学生が来る。山本先生は日本にいますから。冗談じゃない。来週はまた新しいことをやるので、きちんと授業中メモを取ってくれと言う。そうしないと効果がでない。やはり機械とともに、いかに活かして学生の頭にたたきこむかが大事です。

蘇：私の考えでは授業の内容だと思います。

台湾では、さっきお話したように遠隔授業をしています。30校22科目ですけれど、しかし語学の授業はほとんどない。日本語学科の遠隔授業をやっている学校はありません。日本文化や日本社会はオンラインという方式でやっています。しかし、語学の勉強はインタラクション、ただ講義をやっても学生の反応を見なければ学生も緊張感が足りないと思います。台湾で日本語を教えている場合、マスメディアには恵まれています。

学生は日本の情報、日本の文化を吸収したいです。だから、むしろ教師の方が緊張感を感じてます。あまり古い情報だと学生に「先生、それは古い。」と、言われたら困ります。ですから講義だけでやる授業と学生のインタラクションを見なければならぬという授業を分けてやるという方法でいいんじゃないかと思いますけれど。

さっきも台湾では遠隔授業をISDNという方式でやっています。ISDNはやはり画像がきれいじゃなくて学生の意欲がそがれるのは無理ないと思います。ですから、これからASDL、VSDL方式で、それを改善できるのではないかと僕は思っています。

横山：今、蘇先生のお話について一言追加しますと、トピックの選択は非常に大事だと思います。結局、学生が楽しめる授業、自分からのめりこむ授業をやるためには、結局、トピックがおもしろくないとできない。

そのトピックは何か、日本語文化だと、日本のことだけに限らず、例えば1年ぐらい前に、いじめについて調べてきなさいと。それで明海大学との遠隔授業でそれについて日本で勉強している学生と討論したんですが、ふだんまったく授業に参加しないような学生が、「高校生の時に私はいじめられていました。」と、言う。そういう子達にとってそのトピックで非常にモチベーションが上がるという、おもしろい現状があった。ですのでトピックがつまらないと、学生は参加できない。特にオーストラリアの学生はこつこつ勉強するタイプではないので、おもしろくないと、やりたくないという学生が多いので、非常に効果があると思います。

あと、明海大学との遠隔授業でやったのは、毎授業、毎授業を遠隔授業でリンクして授業をするのはあまり効果がないと思います。それについて授業をしたり、考えをまとめたり、発表をまとめたりして、ある程度下調べをして、それについて外国語でのインタラクション、交流ですから、下準備をして準備をすればするほど、交流は生まれやすくなるし、交流が生まれやすくなれば、楽しみも増える。楽しみが増えれば当然、授業にも集中しやすくなります。

堀口：それではこれから、会場の皆さんとご一緒に進めていきたいと思いますが、まず質問があれば手を挙げてください。

フロア1：昨日、浦和の大学留学センターでe-Learningに関するシンポジウムがありまして、私も非常に関心があり、参加してきました。その中で信州大学はキャンパスが5つに分かれていて1つ1つが車でとばしても1時間かかるということで、結構、日本語教育を遠隔教育でやっていることが多いという状況ということでした。その際にも出たのですが、中上級授業で遠隔教育はできるけれど、初中級においては、結局、担当の先生がまわってやらなければいけないという問題、講義形式にしても、語学教育というのは非常に難しい、そういった問題が出てきました。

そして、午前中の神奈川工業大学の発表においては、やはり退屈だとか、難しいというハードルをクリアするために1つの試験とかそういったものを応用している状況を報告されたんですけど、そういった現状を考えてみた時に、また、今日のテーマは遠隔教育というのを日本語教育に応用していくことを考えてみた時に、最終的に語学というスキルと関わってくる問題をどうやって遠隔教育にみなしていくか、という問題になってくると思うんですが、それを本当にやっていくにあたっては、もちろんコンテンツとかおもしろいトピックとかそういったものが有効だと思いますが、最終的に今の教授法というものを遠隔教育にただ単に応用したり、一部改善したりするだけでは、やはり教室での活動が優位になってしまう。つまり、遠隔教育にふさわしい教授法を早急に確立していかないと最終的に小中級の技能教育においては、やはり、教室活動に負けてしまう状況が生まれてしまうのではないかと思います。

遠隔教育には二通りあります。教室で遠隔教育を受ける場合は宿題とかいろんなものでしぼることができるかもしれませんが、個人が自分のコンピュータを目の前にしてやっていく場合はやはり

教授法がかなり関わってくると思うのですが、それについて何か教授法をいろいろ考えられていますか。

李：おっしゃる通り、実際そういうことが遠隔教育の抱えている大きな問題です。実際サイバースクールのことを見ても年少者学習よりは成人対象、いわゆる大学レベルの学校は今のところある程度学習者の自律姿勢をもとにしているから、そういう形にならざるを得ないのではないかと。日本語の場合、中上級の場合は成人に近いと思えば、初級者は年少者に近いので、初級者を相手にして、ただ、遠隔教育だけで教えるのは、とてもむずかしいと思います。ただ、さっき質問の中にも出ましたが、遠隔教育というものにふさわしい教育法があります。それがとても大事だと思います。

例えば1つの方法として折衷の仕方というものがあります。遠隔だからといって1つの先生で、全部を教えるという無理をいうよりは逆に1つのモジュールみたいにそれぞれの教室に担当の先生がいて、それを全部つなげてネットワークの形として、明海の日本側から先生が世界中にネットワークの中で教える。その補助的な役割を現場の先生が担っている。そういった折衷の仕方が現場とネットワークの組み合わせのような形でしたら初級者もある程度解決できるのではないかと思います。

例えば、日本人の1人もいない遠い国の中では、その母国語の先生だけでは日本語を教えられない。そういうところでの日本語のノンネイティブなどところでは遠隔という形で教えたり資料を与えられたりする。また、学習スキルのところでは母国語の先生がそれを担当する組み合わせの形でしたらできるのではないかと思います。

フロア1：どうもありがとうございました。

堀口：今、ご質問にありました教材やコンテンツについてはいかがでしょうか。

李：ついでに、そのコンテンツについて詳しく申し上げたいのですが、実は今、うちの大学の学部の講座の中に、「インターネット日本語」があるんですが、学習者に日本語教育関係のサイトに入って、そのコンテンツを評価するようにする。コンテンツのアクセスの順位までつけて調べてるのですが、そのコンテンツを自分の評価の観点から分析して考えている。何故こういうことをさせているかと申しますと、これから遠隔教育を成功するためにはコンテンツにかかっていると思うのです。コンテンツは誰が開発するか。もちろん先生も開発をしなければならないですが、学習者自身コンテンツを開発すれば、スキルアップにつながると思うのです。こういうコンテンツに対するマインドを持つ学習者の数を増やす。もちろん教師を増やすことが大事だと思ひまして、まず、すでに開発されているコンテンツの中に入って自分で自分に評価してみる、またその改善策を考える、そういう学習の1つのパターンとしてそれを取り上げてみることは、これからの多様なコンテンツについても通用することが前提になります。

今のところ、日本語教育に使われるコンテンツはまだ、始まったばかりというか、実はインフラより、はるかに遅れをとっている気がするんですね。

また、それを英語、フランス語、ドイツ語と比べてみた場合、ドイツ語はちょっと見たことないですが、英語、フランス語より日本語の方がかなりコンテンツでは遅れをとっている。

これから言語戦争はそういうパターンだと思います。

日本語教育はコンテンツ開発にもうちょっと精を出してほしいと思います。

堀口：では、次の質問に移りたいと思います。どなたか挙手をお願いします。

フロア 2：お話の中で評価の件が出てきましてけれど、それを考えると教師の負担ということですね。このあたりのことをもう少し詳しく伺いたいのですけれども、具体的にそれに対する対応を、こんなことをやってらっしゃるとか、或いは、こんなことをやりたいと思ってらっしゃるとか、このあたりのことを教えてください。

堀口：評価のことで先程、山本さんと李さんから人数の多さの大変さということでお話がありましたけど、そういうことをもとにしてということですね。いかがでしょうか。

李：それでは、自分の経験から1つ紹介したいと思います。やはり、評価が一番大きなこれからの障害になると思うんですけど、いくら問題を出しても、学生が自分で直接試験をしているか確かめようがないですね。誰がやっているか見わけのすべがない。それは避けられないのですが。どうしても学生達はお互いに協力しあって答えを出す傾向がありますので、いっそグループごとに試験をさせることも考えられる。グループでお互い話し合っただけでカンニングを打ち合わせの形で認めてしまおうということです。

もう1つはテストの種類を増やすこと、回数だけでなく、いろんなパターンを。例えば、時間ごとにチャットの形でテストを出したりレポートを出したり。また、グループによる宿題を出したり。私は討論をさせたのですが、討論させておいて、ただ参加の回数だけをチェックし、討論の内容は問わない。というのは内容を紹介してしまうとまた、負担を感じてしまうので討論に参加した回数だけを数えて点数にする。そうすると自由に来るんですね。そういう風にいろんなパターン、数を増やして、それを統計をとって採点すれば、かなりの成績を一応期待できる。ワンパターンのテストはそれはやはり問題点ばかりで、主観テストは先生側の形、客観テストの場合は点数に意味はないですね。800名に客観テスト20問したら、普通感覚、教室感覚で問題を作りますと平均点99点なんです。マイナス1点は間違いだったり、機械の操作上の失敗ですね。みな正解を確かめてから入力していますので、それは意味がないですね。そこで、いろいろ問題の落とし穴をいっぱい作って見たら、800名で72点までは下げることができました。それは評価をテストの本質を失っている。落とし穴を増やしたからです。それは失敗を促すというか、全然評価しようという目的に合っていないですね。そういういろんな問題点がありまして、テストの種類を増やすしかないところと思っています。

山本：先程から言っているように、遠隔教育にはいくつかのパターンがありまして、一つは放送大学のビデオ教材や、コンピュータ上にコンテンツが入っていつでも引き出せるという形と、もう一つがリアルタイムの教育。リアルタイムでやる場合でも不特定多数の授業をしている場合と、具体的に二つの教室をつないでいる場合とは評価のやりかたが違ってくると思います。

我々がやっているパターンで言いますと、私は北京の学生達の表情がよくわからない。彼ら全員が一度には映らない。ですから汪先生が常に観察されている。つまり北京の方の現場にいて、どう

いう風に反応しているか、どういうノートを取っているか、あるいは最後にレポートを書かすとか。評価の問題は汪先生にお任せしている。北京外大の学生のことは。もう少しすれば電子メールで一人かはそのような人もいますけれどーという形が考えられますね。

不特定多数になってくると、すでにその問題がオーソライズされていて何百人、何千人単位で一斉に評価を求められている。非常に客観的なテストのような物を用意する。その場合は授業自体が既にできあがっていると思う。評価テストは、かなり集中したものにするということ。そして、放送大学の場合、8学期にわたり同じ講義を繰り返しますから、同じではまずい。自然に成績が上がってくる。

いかにいろんなテストを作っていくか。トーフルやトーイックのように多くの問題の蓄積があるようなものがあればいいが、そうでなければその都度その都度作らなければいけないと大変な苦勞になります。。

明海と北京外大をつないでいるわけですが、明海大の学生は当然観察できるわけですが、非常に大学の授業というものが出席と期末試験で評価するということで終わっているかもしれない。

遠隔の場合は比較的少人数で行ないますので、やはり中学、高校のように日常的な学習活動というものを観察して、それを評価に入れていくという必要があると思う。日本人ですので日本語を評価することはできない。誤字、脱字、見間違えなどを。北京の場合、日本語の理解力も評価に加えることができると思う。相手が言っていることを理解できるか、もちろんだいたいできるわけですが、どのくらい発表したかだけでなく、どのような学習活動を行なっているかも評価に加える。通常の大学の授業で学生を評価するのは違うスタイルをどうしても考え出す必要がある。少人数だからできる、目の前の学生だからできるということですね。このようにいくつかのパターンに分けるといことですね。

堀口：先程、頂いた質問の中でもう1つ、教師の負担という質問があったと思いますが、会場からのご質問がなければ、それについてもう少しお話ししたいと思います。

では、教師の負担ということでいかがでしょうか。

汪：山本先生が日本から発信されます。それを私もメモを取ります。私のメモを見て学生のメモを見る、レポートを見る。普通の教室の授業と違った関係、いろいろ事前に調べたり、学生のメモを見て、これなら理解できているとか判断する。

山本先生の場合、かなり授業内容が幅広いですから、仏教芸能とか、音楽とか、日本の政治、行政というような日本の社会、歴史、文化、各方面にわたっていますので、学生は調べないと、いいレポートが書けない。

今、大学院生で日本社会文化についていくつかコースがありますので、その授業を聞いているところ調べる。ですから、学生の不安も先生の不安も普通の授業よりかなりあると思うので、それぞれ1回50分間聞いて、あとで何十分もいろんな雑誌を調べる。3年に入る頃からレポートを書くのでそのために10冊〜20冊ぐらい本を調べなくてはいけないし、そういう意味でも1回の授業で効果、ただ先

生の1回50分の、「日本の義務教育について」、「江戸時代の外交」についてのテーマだけで学生は資料を調べます。学生もかなり負担が大きいと思います。

李：遠隔授業というのは第1世代から第5世代まで、すべてノルマが多いものですから、企業化というか、企業なみのシステムを必要としてきた。例えば、手紙の通信講座でも先生1人で全部やるのではなくて、チームがあってチームにうつす作業があります。

放送大学は放送局があって職員がいます。今、韓国におけるサイバー大学も技術は専門の会社で全部それは解決してくれます。

また、先生1人で400名を越える場合は1人助手をつけてくれる。800名の場合は2人の助手をつけてくれます。そういう風にチーム作りをしないと、先生1人で大人数の学生を相手にするのは無理だと思いますね。当然人数が多くなるとチームも大きくなってくる。そうしないと負担は解決できない。

堀口：他にご質問はないでしょうか。

フロア3：遠隔教育の可能性と課題というテーマにそって考えますと、一時期国内外問わず衛星通信などで日本語教育を行なう実験は頻繁に行なわれました。実験は行なわれましたが、実情としては今のところ活用されていないということが多いと思ひまして、各国からお越しになっているのでデジタル通信の活用事情について教えていただきたいということと、デジタル通信は上級レベルの学生には非常に活用しやすいですが、初級レベルには非常に使いにくいということが結果として出ていたということと、どうしてもインターネットの場合もそうでしょうが、衛星通信の場合もお話している先生以外に各会場にファシリテーターとかサイドコーディネーターといわれるような、仲介するような人物をおく必要があるという結果が出ていました。そういった人材の育成について何か学校で考えていらっしゃるのかどうかということと、プラスして例えばテレビ画面で見た時に緊張感ある程度作ったり、いい気分にするためにどんな絵を使うのかということを考えて、アーティスティックなことを考える人が必要と聞いた事があるんですが、それはコンテンツの問題でもあるんですが、ようするに日本の国以外にそういったコーディネータとかアーティスティックな部分をつかさどるような人とか、可能性があるかと思うのですが、先程、李先生が助手とおっしゃいましたが、それ以外に、実際にサイドコーディネートする人とか、芸術的分野をコーディネートするとかいうことを考えておられるか、また、可能性があるのかとういことも含めて三つくらいポイントとして、よろしくお願いします。

堀口：ありがとうございます。残された時間がわずかですので、全部に答えていただけるかどうか分かりませんが、どなたか上手に答えていただけないでしょうか。

李：一応、韓国を含めて衛星通信による教育はちょっと、頭打ちになってしまったような気がするのです。テレビ講座からインターネットへうつった気がします。

韓国のサイバーユニバーシティの場合、既にコーディネータとしてデザインが入っています。先生の作ったホームページというのは、かなりがんばってもおもしろくない。

専門家が一緒に作らないと、学習者を満足させられないでしょう。チームの中にそういう専門家も

必要だと思います。衛星通信教育はだいたい同じような、なんとなくとばされてしまいそうな雰囲気だと思うのですが、それはインターネットよりインタラクションの力がちょっと足りない。また、時間的制約という問題点があるからインターネットに負けてしまう気がするのです。

堀口：ありがとうございました。

横山：やはりそういった衛星関係のテクノロジー問題はオーストラリアで様々なアジア諸国に比べて、テクノロジーでも遅れている。

コーディネータという人を置くという点ですが、これは小中高校の話ですが、小学校や向こう側の親とか来ているので、実際には誰か大人を置く。機械をコントロールする人を配置する。ただ、遠隔教育自体はコスト削減からきているものですから、どうしても教員をおくというより、事務の方を置くとか、保護者の方に一人来てもらって監視してもらう形です。

堀口：今日は「遠隔教育の可能性と課題」ということで、2時間半ほど話を続けて参りましたけれど、時間になりましたので終了したいと思います。

今日のお話の中で大きな二つのパターンということで紹介されたと思います。

どちらにも共通することと致しまして、それにふさわしい教材の開発、教授法の開発、そして日本語教育に関連するもの以外で、いろいろな形で多くの人材を養成しなければならないというようなことができたのではないかと思います。

会場にいらっしゃった方もそれぞれ、こういうことに関心をお持ちの方がいらっしゃると思いますが、これからみなさん一緒につながりながら行動していければ有り難いと思います。今日はどうもご参加ありがとうございました。